慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カアル・メンガアと価値心理学
Sub Title	
Author	小池, 基之
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.10 (1932. 10) ,p.2185(679)- 2210(704)
JaLC DOI	10.14991/001.19321001-0679
Abstract	
Notes	慶應義塾創立七十五年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321001-0679

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のことのみが可能である。併し後者を選ぶ場合には、唯一の歴史的現象形態若しくは任意に構成せられたる組織を基礎に置くことは不可能である。アモンは精確理論又は純粋理論の體系と經驗的―現實主義的理論の體系との二體系の結合を企てたが、併し之に失敗したのである。」（前掲書、四〇七―四〇八頁）と。

ディールの立論其物の正否は此處に問題とせぬが、其結論は、蓋しディールの如き立場に立つ者よりすれば當然な適評といふべきであらう。

カアル・メンガアと價値心理學

小池基之

一

經濟理論は客觀的現實性に基かなければならない。此の點からして限界效用理論の無能力については充分に論じられてゐる。然し乍ら一面に於て限界效用理論の有する意義は、唯に價値決定要因としての勞働又は費用の概念に代ふるに效用の概念を以てしたのに止まるものではない。評價それ自體の本質の問題は彼等の價値論に於て初めて正當に認識されたとも云ひ得るのである。即ち從來價値に對する關心は主として價値の想像的な客觀的性質の上に、且つその客觀的と見ゆるものに對する基礎を發見せんとする試みの上に向けられて來た。明白な評價並びに價値の經驗的事實に從つて、複雜なる現象の集合體から價値を孤立せしめんとする努力がなされたのである。斯くの如く評價對象に向つての考察がそれ以前の價値理論の全内容を爲してゐたのに對し、墺太利學派に於ては評價對象の本質に關する問題は拋棄され、價値に對する思辨は價値對象と稱せられる比類なき客觀の形態の經驗的證據を發見することから免れる事を得た。この意味に於て墺太利學派の創始者カアル・メンガアによつて經濟價値論の問題は始めて正しく認得せられたと云ふ事が出來やう。（註一）

かくして經濟價値論は先第一に内在的對象としての「價値」を把握する事を以て初めなければならない。主觀主

義的價値論が提唱した方法は價値問題を認識對象の問題として經濟學に於て重要なる地位を與へるに至つたのである。

一方に於て經濟價値論の更生を齎らしたメンガア、ウィーザア等の價値概念並びに彼等によつて採り入れられた心理的説明はマイノング（Alexius von Meinong）及びエーレンフェルス（Christian von Ehrenfels）によつて展開された一般的價値論、即ち所謂墺太利學派の價値心理學の上に重大なる關聯をもつてゐる事は看過し得ない。（註二）これ等價値心理學は經濟學上の墺太利學派の擴充であると見る事も出來るであらう。事實、その哲學及び方法から見て、哲學上の「墺太利學派」は經濟學上の「墺太利學派」をその中に包攝するものであり、その共通な傾向として自然論的、實在論的傾向を看取する事が出來るのである。

價値心理學は墺太利學派にとつては未開の境地であつた。十九世紀の中葉ヘーゲル哲學體系の崩壞は人々の注意を彼等自身の精神の上に向けしめた。心身の關係の合理主義的な問題に關する形而上學的な見解から轉じて、ミル（The Mills）、ベイン（Alexander Bain）、ロッツェ（Hermann Lotze）、ヴント（Wilhelm Wundt）、及びウェーバア（Ernst Heinrich Weber）、フェヒネル（Gustav Theodor Fechner）等は經驗心理學の新方法の確信を高めしめ、更にコント（August Comte）はその實證主義によつて心理學的研究の社會科學への適用の道を開いたのである。心理學上に於ける斯くの如き變化が價値自體の討究に對して影響を與へたのは當然であつて、新心理學は古き物理的方法に取つて代り、又客觀的意味に於ける價値又は經驗界に於ける客體として價値概念を拋棄して一般價値の問題は新生面への戸口に立つた。然かもこの運動は心理學に於けるヘーゲル學徒及び後期ヘーゲル學徒の先天的分析心理學から新心理學派の客觀的經驗的方法への運動に刺戟され、又それと同時に生じたものである。

かくして曾つては形而上學、倫理學、美學或は經濟學其の他價値概念を基礎とする社會科學に附隨的なものと考へられてゐたこれ等抽象的な價値概念をその從屬的な地位から救ひ上げ、且つそれを哲學的思惟の獨立せる適當な部門としてそれに正當な地位を與へた事に於て、墺太利學派の價値心理學は重要性を有する。（註三）この立場から、而してこの對立運動の中にあつて、マイノング及びエーレンフェルスはその心理學上の考へをブレンターノの心理學説から受けついだ。

ブレンターノは心理學が他の諸科學殊に社會科學の發展に於て演ずべき役割を正當に認めた。ブレンターノの價値心理學上に於ける重要な貢獻と認むべきは次の三つの點に存する。（一）、價値の心理的基礎理論としての一般心理學的方法論及び心理學理論、（二）、その心理學に基礎付けられた價値自體、（三）、倫理學特にある絶對的終局的價値への試みが之である。（註四）彼の心理學理論が彼の基礎的な哲學的立場に基いてゐる事は勿論であるが、その立場の簡單な一瞥は一八九四年十一月二十八日「ヴィーン學藝協會」に於て試みた講演 Die vier Phasen der Philosophie und ihr augenblicklicher Stand（註五）の中に得られるであらう。そしてブレンターノ自身は、哲學の進歩は「カントへ歸れ」ではなくして、カントを通じて眞の研究方法の唱導者ジョン・ロック、アクイノの聖トマッソ、及びアリストテレースへ歸る事にあると叫んでゐる。ブレンターノの興味はその心理學の著書の表題（註六）が示すが如く經驗的方法の可能性の上に全理論を基礎付ける事に存したのであるが、その「新經驗主義」は、イートンの言を引用すれば、「それはロックとデカルトとの結婚である。アクイノの聖トマッソはこの結合を莊嚴にし、アリストテレースはその花嫁を與へた。然し、バークレーとマールブランシュとはこの祝典から除外された」（註七）のである。

ブレンターノに於て注目すべき事は、彼が主觀と客觀との關係から三つの基本的精神活動即ち表象作用、判斷作

用及び感情作用（意欲）を區別せる事である。（註八）表象（Vorstellung）は最も簡單な主觀の客觀に對する關係であり、あらゆる精神現象に遍在する所のものである。この基礎の上に判斷作用が立ち、更に表象及び判斷を基として感情作用が成立する。從つてこの分類は精神作用の自然の順序を表はすものである。表象作用は對象に應じて種々の差を生ずるが、判斷又は感情に於けるが如き性質上の對立は生じない。又判斷及び感情は基礎表象の法則に從ふものではあるが、自己特有の共存、繼起の法則を有する事によつて表象と區別される、（註九）一方に於て判斷作用は感情作用に接近してゐるものではあるが、一は眞僞を標準とし、他は一般價値を標準とする點に於て異なるものである。即ちあらゆる價値は感情作用それ自體の作用から生ずるもので對象に於て獨立せる本質として存在するものではない。（註一〇）かくしてブレンターノは感情作用の產物として價値を基礎付ける。

前述の如く諸精神作用の中で特別な基礎的な意味を有するものは表象である。表象は之を二方面から見得る。ブレンターノに於ては精神現象は何等かの對象を志向的に所有する事を以てその特質とするものであるが、この事は精神現象の根底に横たはる表象の存在について證明せられる。對象が表象によつて表象せられるのは、先づ對象が意識の對象となる事によつてあらゆる精神現象の必然的相關となり得ることを云ひ表はしてゐる。對象は意識せられる事を要し、意識の對象となる事によつて對象としての意義を獲得する。他方に於て、意識は何等かの對象についての意識であることによつて意識の本質を見出すことが出來、更に意識は自己自らの意識をその中に含む事を以てその本質とする。この意識の特質は即ち內部知覺（Inner Wahuehmung）又は內部意識であり、こゝに精神現象の本質を闡明すべき一つの方法を見出した。內部知覺は意識の唯一の把住方法であると共に、又唯一の存在方法であるが故に、それは又心的現象の唯一の認識方法となり得るのである。物的現象は意識の對象として唯外的に存在するのであるが、精神現象に於て意識が意識せられるのは唯內部知覺の對象としてのみである。（註一一）かくしてブレンターノは精神現象について、それは何等かの對象を指示する事、それは內部知覺の對象である事、更にそれは志向性の外に現實的實在性を許すべき唯一の現象であることを擧げてゐる。（註一二）

この內部知覺の理論は彼の精神現象の全般を通じて重要な役割を演じてゐるものであり、從つて彼の價値論は一つの精神現象として內部知覺の上に基礎付けられてゐる。價値は內部知覺によつて意識の對象として把握せられる。彼に於ては物的現象の知識は精神現象のそれに從屬するものであり、從つて觀念論的な立場が承認せられてゐる。「精神現象は言葉の本來の意味に於て知覺を有する唯一の現象である。吾々はそれ等が有意的なるのみならず眞實の存在が屬せしめられる現象であると云つてもよいであらう。」（註一三）かくて彼の新經驗主義（註一四）に於ては內部知覺が優位を與へられてゐる。後に價値論への重大なる結果を伴つて、マイノングの「客觀說」の柱石となつたのはこの心的活動であつた。

註　一　杉村廣藏「價値論史」（岩波講座「哲學」）五頁以下參照。

註　二　マイノングは哲學研究に志す直前一八七四年頃、維納大學でメンガアの經濟學講義を二學期間（zwei Semester）聽講してゐる。彼はこのメンガアの影響が彼の後の價値論に對して及ぼす所大であつた事を認めてゐる。（Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellung Bd. I. 1923. S. 10 3.）然し間もなく彼は哲學へ向ひブレンターノ（Franz Brentano）の知己となり、一般價値論の研究へ沒入した。（Howard O. Eaton; The Austrian Philosophy of Value 1930. p. 92 ff. 參照）

註　三　勿論價値を特殊な價値科學から獨立して取り扱ふ事は不可能である。倫理學的、美學的、又は經濟學的、その他如何なる特殊な價値形態をも離れた價値は考へ得ない。（Eaton; op. cit. p. 16.）

註四　Eaton; op. cit. p. 25.

註五　一八九五年刊行、池上鎌三譯「哲學の四段階と斯學の現狀」（哲學論叢二七）岩波書店、昭和五年。

註六　Psychologie vom empirischen Standpunkt. Bd. I. Leipzig. 1874. 尙第二版オスカア・クラウス（Osker Kraus）により序文及び註を附せられて一九二四年、一九二五年、一九二八年に出版さる。（第三卷第二部に當る可き部分未刊）

註七　Eaton; op. cit. p. 38.

註八　この區別はデカルトの idea, indica, voluntas. と類似の意見である。かくしてブレンターノに於ては古き分類の感情と意志の二作用が結びつけられ、カントの知覺とベインの知性とが表象と判斷との二つに分けられてゐる。

註九　Brentano; Psychologie vom empirischen Standpunkt. hrsg. von Osker Kraus. Bd. II. S. 65 ff. Eaton; op. cit. p. 44 ff. 市野寅雄「對象論及び意識論の哲學」（誠文堂哲學講座第十二卷）八頁以下參照。

註一〇　Brentano; a. a. O. Bd. II. S. 89.

註一一　山内得立「現象學派の哲學」（前揭哲學講座第十一卷）五六頁以下參照。

尙ブレンターノは此の見地から心理學及び社會科學の前途に對して刺戟を與へたウェーバア・フェヒネルの法則に對して、生理的刺戟に於ける同樣な相對的增加は感覺に於ける等しき增加を與へるものではなく、等しく注意し得る增加を與へ得るのみである、等置は外的刺戟に存せずして內部知覺に存するものとなし、次の如き制限を加へてゐる。一、この方法は外的刺戟によりて惹起された觀念にのみ適用される。二、感情の强度に影響を及ぼす注意の强度の如き間接的事情を無視する。三、該法則に於て相關々係にあるものは「外的刺戟」に對する「內部知覺」ではなく「內部知覺」相互の關係である。（Brentano; a. a. O. Td. I. S. 99 ff.）

註一二　Brentano; a. a. O. Td. I. S. 136-137.

註一三　Brentano; a. a. O. Bd. I. S. 129.

註一四　彼の經驗主義の主張する所は內部經驗の可能である。彼に於ては「多くの問題に於て單に蓋然性のみを獲得し得るに過ぎぬのであり、他の問題に於ては此の蓋然性をさへ獲得する事が出來ないのである。ではあるが併し、假令吾々の知識は悉く斷片的のものであるとはしても、然かも確かに此の斷片的なもの丈けで既にある巨大なるものなのである。人間は世に生けるものの最も力あるものとソフォクレスは云つてゐる。そして學こそはゲーテの語を藉りるならば「人間最高の力」である。此の力は既に屢々人間を人間自身がその最も大膽な夢想に於て希望した所以上に導いて行つた。」（Brentano; Die vier Phasen der Philosophie. S. 20. 池上鎌三譯前揭書三七頁）

二

ブレンターノは感情作用の結果として價値を見る事によつて主觀主義へ傾いたが、同樣の感情が反對の欲望を導く事があり得る、即ち「欲望の流動性」の理由から價値を欲望に基かしめんとする見地を排した。更に價値と欲望との關係の分析についてはマイノンダ及びその後繼者エーレンフェルスの思想を追求する事になる。

前述の如く經濟學者の影響を受くる事大であつたマイノングはメンガア、ウィーザアによつて承認せられてゐる概念に從つて價値を分析、決定しやうと試みた。然し乍ら彼は價値を欲望及びその滿足の語を以て定義せんとする事に對し、多くの困難を見出してゐる。その理由は欲望と價値との並行せざる事即ち實際に欲望が存在せざるに拘らず、しかも大なる價値が考へられ又は導かれる場合があるからである。而して價値を有用の意味に於て把握せんとする試みは、價値對象が常に因果的に、快樂の如き、ある內在的價値に直接に關係してゐる結果をまねくやうな場合には明らかに容易な事である。然し有用と價値との因果關係については二つの困難がある。その一は價値對象

の直接の結果として快樂を伴はない場合である。此の場合將來に於て快樂をもたらすではあらうが、快樂の原因と快樂とは別個のものとして考へなければならない。事實上後者が支配的である場合には、吾々は一般に有用性についてではなく、快樂について語るであらう。（註一五）從つて有用性は間接にのみ或る終局の快樂又は他の價値を導く場合にのみ顧みられる。更に價値對象から快樂の直接原因を跡づける可能性がなく價値を有する場合にも、有用性を以て價値を定義する事の困難が存する。快樂を導くものは價値對象ではない。價値は有用性に於てではなく快樂に於て定義されなければならない。彼は有用性と價値との關係について次の如く述べる。「有用性を快樂の原因力の概念に限定する事は、その中に「快樂」の觀念をも包含し、又實際に「快樂」を以て有用性に替へんとする事に於てあまりに廣汎に過ぎ、同時にそれは因果關係以外の方法で快樂に關係せる場合を包含し得ない有用性の多くの場合が存する事に於てあまりに狹小に過ぎる。」（註一六）

而してマイノングは快樂を典型的價値として考へてゐたから、有用が欲望の語に於て定義され得ないとすれば、價値を有用の語に於て定義する事は出來ないであらう。彼の目的とする所は價値概念を有用性の概念から導く代りに後者を前者から導かんとすることにあつた。

價値對象から快樂の直接の因果關係の可能性を排する場合、價値は如何にして定義せられるか。價値が快樂の原因に明らかに關係してゐる場合には價値感情は快樂感情であると云ふ事が出來るが、價値感情と、價値對象によつて惹起された感情とが一致しない場合には、價値感情と價値對象との間を結びつける何物かゞなければならない。この場合價値對象の存在は價値感情の原因である。この價値感情と價値對象との關係を因果付けるものは判斷、存在判斷である。（註一七）從つて彼に於ては價値概念の根本的特徴の中には少くともその一部に判斷的なものが含まれてゐる。（一八）即ち價値は存在判斷と感情との適合として述べられる。

彼に於ては價値は判斷と感情との合成物であつた。（註一九）從つてたとへ快樂及び快樂の因果關係の觀念が彼の思想から離れないにしても、それは彼の價値の定義にとつて本質的のものではない。感情がその前提として存在判斷を有するといふことがその本質である。彼のこの立場は價値經驗の抽象的記述に限られ、その基礎は客觀主義的現實主義的である。從つて個人の生活に於ける評價過程の心理的起源及びその實際的機能については深く立ち入つてゐない。この一般的價値論から、欲望の本質的現象、實際行爲の指導概念としての價値の考察はエーレンフェルスに殘されたのである。

註一五　Meinong; Psychologische-ethische Untersuchungen zur Werttheorie. Graz, 1894. S. 11.

註一六　a. a. O. S. 12.

註一七　a. a. O. S. 21. 22.

註一八　此の點に於てブレンターノの影響が看取せられる。ブレンターノは此の見解を承認して價値判斷は判斷作用と感情作用の現象の類推以上に出るものではないと主張した。從つてマイノングに於ては價値は單なる判斷以上のものではあるが、唯價値判斷と論理的判斷とは異なるのみならず論理的判斷は價値判斷の中にその全き部分として入り込む事を主張する點に於てブレンターノと異なつてゐる。

註一九　觀念は常に判斷に含まれて居り、吾々は判斷を形成する各對象から觀念を形成する。が判斷に於ては單なる觀念から離れしめる何物かゞある。判斷はその附加物として肯定又は否定を含むがこれは決して觀念の附加物又はそれを基礎として有するといふ結果から生ずるものではない。（Meinong; a. a. O. S. 32.）感情についてはブレンターノの三つの精神作用の分類から脱して、それは觀念と判斷との一部分を構成するものであり、その各々は感情

によつて資格付けられるものであると考へた。

三

マイノングに於ては價値論は主として靜態的な方面に向けられたのに對し、エーレンフェルスに於ては主としてその變動と發展の方面に向けられた。エーレンフェルスは云ふ、「二者間の根本的な特質を數言を以て云ひ表はすならば、マイノングの研究を價値論及び倫理學の靜態的研究とし、私の研究を動態的となすことが出來るであらう。一方に於て私は私の注意を主として價値の變動及び發展に向け、私の目的にとつて必要不可缺の場合に限りその定義及び概念を考察したが、マイノングは價値論及び倫理に於ける基礎的な概念の包括的な見解を提供し、一般的價値論及び特に倫理的價値の現象の不斷の變化に於て永久的なるものを一定の法則の内にもたらした。二つの研究は相互に矛盾すると云ふよりもむしろ補充的のものである。」（註二〇）この動態的研究を彼は主觀主義、内省主義の上に基礎付けた。即ち彼の立場は欲望の生産物として（原因としてではなく）の價値をその機能的な見地から見やうとするにあつた。

吾々は彼の價値論に於て三つの源泉を求める事が出來る。（註二一）一、彼の最初の著作 Über Fühlen und Wollen. (1887)に於て表明せられた欲望の性質に關する心理學的内省的觀察、二、墺太利學派の經濟學者殊にメンガアーウィーザアの著作の影響、三、ダーウィンの自然淘汰説による基礎付け、が之である。墺太利學派の經濟價値の理論は、表面的には心理學的に見えるが、實際は心理的價値構成の本質に關するある簡單な假定を根底とする價値の快樂主義的微積分學である。その假定はベルヌイ（Jacques Bernoulli）及びベンサム（Jeremy Bentham）から得られた。エーレンフェルスはこの合理主義的理論の心理學的分析をなす爲に選ばれた一人と考へた。彼は彼の心理學的研究を價値に於ける感情と欲望との相關々係の分析、及び價値經驗に於ける他の心理的要素の考察を以て初める。欲望の方向並びに程度は感情によつて定められる。然し乍らこの事は價値が感情によつて定義される事を意味するものではない。欲望と感情とはその兩者間に何等共通なるものは存在しないけれ共、前者は發生的に感情の上に基礎付けられる。而して感情は欲望せられる對象の存在又は非存在に關して經驗せられる。此の點に於てマイノングの價値論と共通のものを含んでゐる。然し乍ら、思惟の作用はマイノングに於けるよりも限定されて、望ましき對象の觀念を喚び起すこと及びそれが達せられる手段並びにこれ等の手段が對象に導かれる判斷の暗示に限られてゐる。（註二二）

價値に關する理論は吾々の價値客體に關する吾々の見地によつて非常に變化を受ける。即ちエーレンフェルスの理論に於ては、欲望は發生心理的法則の結果、その終局の目的としてそれ自體快樂に向ひ、不快から脱れんとする傾向を有する。又個人自身に對してその觀念が實際に快樂を喚び起す欲望は望まれ、不快を伴ふものは退けられる。「即ち價値を有するといふ事は望まれる事と同樣である。」事實それを欲するものに對して價値を持たないものは何物もない事は經驗の示す所である。然しマイノングは之に對して「此に事物の自然的關係は反對であるやうに思はれる」と述べてゐる。即ち價値は欲望によつて創造されたものではなくして、むしろ欲望以前に存在した樣に思はれるからである。（註二三）然し乍らマイノングは他方に於て必ずしも欲望に對する價値の先行を認めない。（註二四）從つて彼の意味する所は價値と欲望との相關々係であり、唯欲望と價値とは一致し得ないといふ點から欲望は必ずしも價値に對する一定の條件とはなり得ない事を主張してゐる。「更に他の事情は明らかである。私は既に存在してゐるものを欲しないが、現に存在しない限り欲するのである。然し乍ら價値はそれが對象が存在する時に又その限り

對象に歸せられるといふ前提に依存する事甚だ少い。」（註二五）然し乍らエーレンフェルスは此の批判に對し、「潜在的存在」の概念を以て答へてゐる。「吾々は價値を吾々が實際に欲する所のもの、又は吾々がその存在を悟らない場合には事實欲するであらう所のものに歸する。物の價値はその望ましきことである。……價値の大いさは望ましき事の程度であり、それに附せられてゐる實際の欲望の強さに比例する。吾々がそれを欲する事益〻強ければ強い程、その有する價値は強い。」（註二六）即ちエーレンフェルスに於ては存在物は價値を有し、非存在物は唯欲望を有し得るに過ぎない。眞實の價値と欲望の不一致といふ點からエーレンフェルスの價値論に對してなされた批判は、又等しくマイノング自身の理論に對しても向けられなければならない。この事實と理論の背反から彼が感情に基礎付けた價値の定義に對する辯護の過程に於て導いたものは選擇の理論である。かくして墺太利學派の欲望理論は一般的價値論への適用に於てより深い分析を見出した。

マイノングは價値を感情の上に基礎付けたけれ共、價値の大きさの變化は感情の大きさの變化に伴はないことを認めた。メンガア、ウィーザア等の墺太利學派の經濟學者はこれ等の困難を財數量の概念を經濟的考慮に入れることによつて解決しやうと試みた。マイノングは反對感情（Gegengefühle）の概念を導入してこの觀念を彼の一般的價値論に適用した。即ち存在判斷に附隨する感情の基礎の上に價値を置く代りに、彼は價値を一は對象が存在するといふ判斷に基いた、他は對象が存在しないといふ假定に基いた二つの感情の交互作用の產物として定義する。「價値の大いさは單に對象の存在が評價さるる強さにのみならず、對象の非存在が評價さるる強さに依存する。……價値は對象の存在並びに非存在と結びついてゐる價値感情の強さの函數である。」（註二七）從來經濟學者によりて「效用遞減の法則」と稱せられた所のものは、このマイノングによつて導來された「反對感情の理論」の特殊の場合として示されてゐる。即ち使用し得る大量のある財が存在する時、この大なる供給のある一部を失つたといふ假定から生ずる非存在感情は顧みるに足らない。

然し乍ら價値が存在感情と非存在感情の強さの單純な合計に等しい事は決して明らかではない。經濟價値の場合に於て、自由財の評價はその所有の高き評價とその非存在の低き評價の合計ではない。その場合には水は高き評價を有し自由財ではなくなるであらう。經濟的評價の眞の性質は、それが二財間の比較、即ち交換的評價である事を認めれば明瞭となる。絶對的意味に於て自由財は存在しない。マイノングに從へば二經濟財の交換の作用は次の四つの概念を含むものである。（A）、現在所有する財の實際的及び從屬的效用（B）、購買せんと欲する財を得る事が出來なかつた場合に受けなければならぬ犧牲、即ち需要、（C）、購買せんと欲する財の潜在的効用、（D）、購買せんと欲する財を得る爲に拂つてもよいと思ふ犧牲、即ち費用が之である。AとBは判斷を價値感情の前提とし、Cと Dは假定をその前提としてゐる。此の場合交換は賣手にとつて存在感情Aと非存在感情Dの算術的合計が、存在感情Cと非存在感情Bの算術的合計に超過しない場合にのみ成立する。反對の條件が買手に妥當する。反對感情の重要性はこれ等の感情が結びついて當該財の評價をなさしめる心的過程の本質に存する。經濟財の場合に於て實際の交換は賣手と買手の二つの評價の綜合的過程を條件とするのであるが、この事は當該財の一方の評價が效用と費用、他方の評價が需要と滿足の綜合によつてなされるといふ事を意味するのではない。（註二八）かくして彼は經濟的評價の心理的分析を試みた。

更に彼は彼の價値論の深化の爲に動機の理論へ入つてゐるが、この點に於て彼はエーレンフェルスによつてみとめられた欲望理論へ近付いてゐるやうである。（註二九）然かも彼は價値を欲望を以て定義する事を排する。彼は云ふ

「吾々は動機の闘爭に於て、又はその表現をよしとするならば生存競爭に於て、欲望の對象としてそれ自體支持せんとする對象の能力として價値を示し得る。」（註三〇）即ち彼マイノングによれば兩立し難き二財間の闘爭の特殊の場合にのみ欲望に歸屬せしめられる事を注意する必要がある。此の點に於てマイノングは價値の欲望理論への限界を示してゐる。然し乍ら、彼によれば價値は闘爭の産物であると見られてゐるけれ共、エーレンフェルスによつて定義された欲望と相去ること甚しくはない樣に思はれる。

註二〇　Ehrenfels; Ethical theory of Value. in: International Journal of Ethics. Vol. VI. 1896. p. 371 f. cited from Eaton; op. cit. pp. 180-181.

註二一　Eaton; op. cit. pp. 116-117.

註二二　Ehrenfels; System der Werttheorie. 2 Bde. 1897. 1898. Bd. I. S. 23.

註二三　Ehrenfels; Werttheorie und Ethik. in: Vierteljahrschrift für wissenschaftliche Philosophie. Bd. 17. 1893. S. 89. Meinong; a. a. O. S. 15. Ehrenfels; System der Werttheorie, Bd. I, S. 23.

註二四　「私にとつては感情と欲望の關係は價値概念の援助によつて打ち立てられる事に何等の非難もないと思はれる。それは次のやうな方法でである。それが存在する場合、少くとも私にとつて主觀的價値を有する以外のものは何物も望まれない。この意味に於て各々欲望對象はそれを欲してゐる人にとつて價値對象でなければならない。この場合欲望が價値の上に置かれるか價値が欲望の上に置かれるかはこゝに臆測することは出來ない。又事實如何なる試みもなされ得ないであらう。私に誤りなしとすれば一つの場合と同樣に他の場合も起り得るから。」（Meinong; Psychologische-ethische Untersuchungen. S. 97.）

註二五　Meinong; a. a. O. S. 15 f.

註二六　Ehrenfels; System der Werttheorie. Bd. I. S. 53.

註二七　Meinong; Über Werthaltung und Wert. in; Archiv für systematische Philosophie. Bd. I. 1895. S. 337. Eaton; op. cit. p. 186.

註二八　Eaton; op. cit. p. 186 ff.

註二九　マイノングは使用せられる二對象の中強い欲求を有するものを即ちより欲する所のものを選ぶ事を主張する。しかして、この欲求と價値感情との關係は豫知の事實であり、それが存在する時に、欲求が價値感情に基礎を置くか又はその反對であるかを無視して、強い價値感情を有するものをより強く欲する。

註三〇　Eaton; op. cit. p. 189.

四

既にマイノングは Ueber Werthaltung und Wert. に於て價値の尺度として對象の全感情が感ぜられないといふことを指摘する爲に反對感情の概念を導いた。人は常に反對感情を考察しなければならず、その價値の前提の一は判斷であり、他は假定であることも前に述べた。彼に於ては價値は評價とは異なり、規範（Norms）の記述でなければならない、即ち單なる行爲以上のものである。たとへ價値論はそれが取り扱ふ現象の要素として感情及び欲望の重要性を看過する事は出來ないにしても、これ等の機構のみを以て滿足する事は出來ない。價値はそれを表はす評價に關係してゐるがそれに從屬するものではない。價値は思惟を含み、思惟は判斷を含む。かくして彼に於ては判斷は常に價値の前提要件として取り上げられてゐるが、此に含まれてゐる問題は將來財の假定的な價値と、存在が價値の條件であり、非存在に欲望を限るといふ命題との關係である。然し乍ら欲望は非存在對象に限られても非存在對象は欲望の對象を提供する事はあり得ない。この事情は欲望を能動的現象と見るエーレンフェルスをして價

値を「對象が主觀の欲望傾向に對する關係」として定義するの止むなきに至らしめた。（註三一）その結果として對象は主觀が對象の存在の確信を有しない限り主觀によつて欲せられる。かゝる正常な判斷の缺除の場合には唯假定的な判斷、從つて假定的な價値のみが可能である。即ちマイノングに於てはこの場合價値の二つの前提は共に假定であり、從つて價値は現實的と假定的とに區別すべきであり、エーレンフェルスの如くあらゆる評價を欲望傾向に限定すべきではないと主張する。

反之、エーレンフェルスに於ては價値對象の觀念の强度を決定する一要因として判斷の機能を認めやうとする。（註三二）即ち個人の經驗する感情的反應は對象の觀念が心に持ち來す直觀的知識に基く事大である。價値の決定に於て存在感情に依存するとすれば、觀念の明確さがその標準として承認されなければならない。その結果一般に觀念の明確の度が强ければ感情的に反應する事大であり、從つて欲望を導く。欲望の現象は意識に於ける觀念の侵入及持續に對する本來の心理的法則に關して說明せられるものである。

更に判斷と評價との關係は吾々をして價値の重要な區別へ導く。即ちエーレンフェルスは對象の價値に對する意識（Werthaltung）と價値評價の純智的作用（Wertschätzung）とを區別し、（註三三）この見地から內在的價値と外附的價値とを對立せしめる。「吾々は根本的法則として――それは經驗によつて容易に知り得るが――次の事を承認しなければならない。即ち內在的價値に對して、外附的價値は常に反省又は理性の活動を媒介としてのみ構成され、かくして、此に於ては評價は Wertschätzung 又は Werturteil として現はれる。そして吾々は常に對象を內在的價値がその存在に依存すると信ずる程度に從つて外附的價値として評價する。」（註三四）マイノングはこの區別を評價過程の分析から企てて同樣の結論に到達した。彼はこの區別を「第二次的假定的判斷」と「第二次的假定的判斷」との間の區別に基礎付ける。前者はそれに基いて價値對象の存在をさとらしむる最高の存在判斷であり、後者は價値對象の特徵に關する判斷である。エーレンフェルスはこの點に關し、マイノングとの理論の根本的共通點を認め、更にその擴張に注意を拂つてゐる。「夫々の記述が固有價値（Eigenwerte）と效果價値（Wirkungswerte）についてなされねばならぬ。これ等についてマイノングは著しい貢獻と共に價値論に於ける私の地位を承認した。マイノングは特に間接の價値評價を第一次的判斷即ちそれと共に感情を生ずる基本的判斷への第二次的判斷の附加を要件として假定する事によつて心理的に說明しやうとしてゐる。例へば貨幣價値の間接的評價は、『私は斯々の貨幣數量を有する』といふ第一の判斷に、私がこの貨幣を用ひてなし遂げられるものを示す第二次的判斷が附加される事實によつて心理的に可能ならしめられる。この決定は價値論に於ける理論的考察の精密なる制限を可能にする。」（註三五）

一方に於て價値は又直接價値と間接價値に分けられる。エーレンフェルスに從へば直接價値は欲望の對象として、意識に於ては價値として認めるのに何等判斷的過程を要しないものであり、間接價値は判斷の媒介を以てのみ直接價値となり得る。マイノングがこの媒介に於て唯因果的基礎付けのみを見たのに反し、エーレンフェルスはこの兩者を結びつける二つの可能なる判斷の形態、即ち因果的判斷と構成的判斷とを認めた。然しマイノングは總てのものが間接價値ではあり得ない點に於てエーレンフェルスに同意してゐる。「若しも多くのものが他のものの故に吾々に對して價値を有するならば、結局他のものへの絕えざる關係に終局がなければならない。そして或るものをそれ自身の爲めに評價する場合が生ずる事は先天的に明らである。」（註三六）勿論因果的關係は生產財と享樂財の關係に於けるが如くAはBの故に價値を有する場合である。然し此の外に尙その一部分として直接價値對象を包含する、即ち關係的に欲望の對象を含むの故を以て對象を價値に構成する所の判斷が存する。この關係は墺太利學派が補完

財の價値として展開した所のものである。（註三七）補完的な價値は價値構成物の形成に於て他と結合して初めて高き價値を有するに至る。この構成的判斷を媒介とする間接價値は直接價値に近い性質を持てゐる。（註三八）

この意味に於てエーレンフェルスがみとめた內在的價値と外附的價値と、直接價値と間接價との間に設けた區別についてはマイノングも本質的一致を示してゐる。從つて內在的價値は、その評價される資格付けに關し何等合理的判斷過程なしに、それ自身の爲めに考へられる價値である。此の場合マイノングに於ては勿論存在判斷を前提としてゐる。反之、外附的價値は何等かの推論的過程を含む。此の場合マイノングに於ては存在判斷は附加的前提である。

內在的價値の基礎として感情が承認されるのに對して、外附的價値の場合にはむしろ欲望が基礎となる。エーレンフェルスは一部分非存在の故に欲望が生ずるといふマイノングの意見に同意する。即ち吾々は內在的價値の缺除の限り外附的價値を欲するものである。而して外附的價値を欠く場合には吾々の最初の關心及び活動は、內在的價値を得る媒介として、その獲得に向けられる。從つて外附的價値を得た場合、吾々の關心は、吾々が外附的價値によつて得んと欲した缺除せる價値、即ち內在的價値にうつるのである。內在的價値が生ずるに至つて欲望は感情に代るであらう。かくして感情は存在する價値の特性であり、欲望は存在せざる價値の特性である。そしてマイノング及びエーレンフェルスの立場を概括するならば、マイノングは主として抽象的分析に關心を有し、內在的價値に最もよく妥當する定義を見出したのに反し、エーレンフェルスは動機の心理的研究を志し、本質的に外附的價値から價値の考へを導いた。（註三九）

註三一　Eaton; op. cit. p. 197.

註三二　Ehrenfels; System der Werthorie. Bd. I. S. 60.

註三三　a. a. O. S. 70 f.

註三四　Ehrenfels, Wertheorie und Ethik. S. 95. Eaton; op. cit. p. 199.

註三五　Ehrenfels; The Ethical Theory of Value. p. 375. Eaton; op. cit. p. 200.

註三六　Meinong; Psychologische-ethische Untersuchungen. S. 60.

註三七　Carl Menger; Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. Aufl. 1923. S. 21 f. u. 148 f. メンガアが諸財の關聯に着目して財を種々の序次に分けた事は有名である。尙 Böhm-Bawerk; Kapitel und Kapitalzins. II. Abt. Positive Theorie des Kapitales. Bd. I. 4. Aufl. 1921. S. 206 ff. 參照。

註三八　この立場から彼は價値を次のやうに分ける。

- 價値
  - 間接價値
    - 構成的及因果的
    - 純因果的
    - 純構成的
  - 直接價値
    - 內在的價値
    - 外附的價値

（Eaton; op. cit. p. 166.）

註三九　Eaton: ibid. p. 203.

五

かくして吾々は墺太利學派の經濟價値論が價値心理學に於て如何に擴充されたかを見た、これ等價値心理學に於

て展開された一般的價値論に於ては、經濟價値はその特殊の場合として取り扱はれた。（註四〇）經濟價値が一般價値の中に於て占むる地位はその量的規定による。即ち「經驗的存在の價値に於ける諸々の現象が數學的概念によつて理解されるのは數學的存在の世界を支配する法則を制約として理會されるのであるが、それと同樣に一般に數量的概念により何等かの仕方で或る價値に關する認識が企てられる限りにおいてかゝる認識は經濟的價値の世界を成り立たしめる數量的關係の理會によつて制約されるとも云ひ得られるであらう。」（註四一）勿論量的規定による價値概念の思惟は價値內容に到達し得ず、唯皮相的な觀察を與へるのに過ぎないかもしれない。しかも價値論の本質を評價それ自體の本質の闡明に向けることによつて、墺太利學派の價値論の功績が一般的價値にまで押し擴げられてゐる。從つて彼等がその影響の下に立つたメンガアの價値論もこの意味に於て解さるべきであらう。

價値判斷は價値內容の認識手段による把握であり、價値概念による對象の把握である。メンガアに於ては價値概念は古典學派に於けるが如く財それ自體の內にではなく、財と欲望との關係概念として基礎付けられた。價値概念は意識の內に存在するものであり、「價値は經濟する個々人が、財に對する支配が彼等の生活の、又は彼等の幸福の確保に關して有するところの意義に關して構成する一つの判斷である。」（註四二）即ち彼に於ては價値論の焦點は「欲望充足の適合關係」の中に存する。經濟を以て一つの因果聯關と爲す彼の見解から、欲望充足の諸原因は純粹なる心的事實である內的原因と外界の內に存する外的原因の二つに區別することが出來るが、外的原因は更に有用性（Nützlichkeit）と財（Güter）と爲す事が出來る。此の場合にはその特殊な原因の特性と、その支配の可能性がその標準となつてゐる。かくして「人間の諸欲望の充足に對して因果的聯關に置かれ得る能力を有する諸物を吾々は有用性と名付ける。しかも吾々がこの因果聯關を認識し、同時に當該諸物を吾々の諸欲望充足に事實上招致し得る限りに於て吾々はこれ等のものを財と名付ける。」（註四三）即ち財たる資格も欲望充足の適合關係から規定せられるもので、一つの「物概念」ではなくして一つの「關係概念」であり、欲望なる主觀的事實と外的對象なる客觀的事實との關係をその中心觀念としてゐる。從つてたとへ發生的には欲望を出發點としても、この諸關聯の認識の決定的な意味は財たる資格が財に固有なるもの即ちその個性ではなく、或る特定の諸物が人間に對して立つてゐる一つの關係としてのみ現はれる事を示す點に存する。（註四四）從つて財の間接的關係である欲望の適合關係にその重點を置く價値觀點にあつては、その根本觀念は物が經濟主體の欲望に對する關係である。（註四五）

この評價過程の心理的分析に於て、ウィーザアはメンガアより一歩進んでゐる。彼によれば一定の財に價値が認められる爲には一定の經濟主體が一定の欲望を有するのみならず、欲望充足の關心を有しなければならない。この欲望充足の關心を名付けて「欲望價値」（Bedürfniswerth）又は「欲望充足の價値」（Werth der Bedürfnisbefriedung）と云ひ、それが財に投影された時に「經濟的價値」が生ずる。「財が與へる一切の效用は結局欲望の充足に歸着する。從つて財の價値はその效用から生ずるといふ見解は嚴密に云へば財が創造する欲望充足から生ずるといふ風に云はなければならぬ。欲望の充足こそ第一次的に人間にとりて價値を――通常の用語を以て云へば――重要性を持つところのものであり、眞に欲求せられるもの、欲求價値（Begehrenswerth）である。そして人が財をそれ自身のためにではなく、充足のために欲求すると同樣に人は財を充足のためにのみ評價する。財價値は欲望價値から誘導されたものである。」（註四六）即ち欲望價値は固有價値であるが、財價値はそれから誘導された第二次的價値である。

扨價値概念を以て關係概念なりとするこれ等の見地には超主觀的な要素を含んでゐるが、この意味に於ける價値概念は既にアリストテレースに於て見出される。アリストテレースは價値の概念要素として欲望の外に物の性能を

擧げ、これ等二つの契機による相關的なるものを經濟價値の特質と見た。彼に於ては一切の價値は使用價値である。從つて物財は二つの性能に應じて使用價値と交換價値とを獲得するが、（註四七）交換價値は使用價値の一種として現はれるに過ぎない。交換關係は使用價値によつて表はされる欲望を基準として可能となるのであるから、彼に於ては欲望は「人間の間に結合あらしむる根基」の意味である。彼の思想の中に於ける超主觀的なるものに於て眞の經濟價値が見られ、この超主觀的なものを直視せんと努力する事によつて、カアル・メンガアは內在的對象としての價値を把握せんとしたのである。（註四八）

而して、この墺太利學派の擴充であり、それをその中に包攝する價値心理學はこの價値の把握の仕方に於て深い交渉を持つてゐる。吾々が價値心理學との交渉に於て注意しなければならないのは、價値概念構成の心理的操作ではなくして、むしろ內在的對象として價値の把握の仕方についてである。即ち墺太利學派に於ては使用價値は單なる性能ではなく、特定の主體が與へられた狀態の下で感ずる限定せられた欲望に關して、財が措定されてゐる。使用價値は全部效用ではなく、限界效用である。換言すれば物の性能と價値との關係概念として自然的使用價値が規定され、この價値の限界に於て限界效用概念を構成して、そこに交換價値の妥當性を見出したものと云ひ得る。

・價値概念を內面的對象として把握することによつて、メンガアが以て價値判斷の規準とした「經濟性」（Wirtschaftlichkeit）の概念は次の如き意味を有する。經濟性は欲望を「完全に」又は「能ふ限り完全に」充足せんとする努力である。（註四九）この經濟性によつて理論經濟學に於ける精密法則の定立が可能ならしめられる。（註五〇）即ち經濟法則は一般に經濟性の表明であり、從つて經濟學的構成の中心觀念は經濟性にあるといふことが出來る。經濟性の理解は個々の經濟現象を通じて求められ、從つて經濟性は經濟行爲一般の內面的法則である。メンガアに從ふならば經濟とは財の需要の充足に向けられた配慮的行爲、合理的なる生活秩序であり、（註五一）その秩序付けに於て經濟性の妥當が見出される。

曾つて經濟性は萬物の生成循環の理法と考へられた。フィジィオクラット以來の自然的秩序の觀念が之である。彼等は自然法の原理に基いて經濟現象を把握することによつて、外界的現象の規則性を見出さんとした。（註五二）彼等にあつては富の生產、財の流通過程等の、經濟現象の生起の間に見出される自然法則が中心問題であり、從つてそれ等の方法は外面的であつた。反之、墺太利學派にあつては經濟性は經濟行爲の合目性からする價値判斷の基準として理解された。從つてその性質に於て內面的である。限界效用の法則はこの經濟性の精密なる法則的表現に外ならない。即ち限界效用法則は生活秩序の原理として設定された一つの法則である。この意味に於てそれは價値付けの根本原則であり、一切の評價の基本關係となる。此に價値充足手段たる財の價値は生活秩序に於てその有する意義によつて定まるとなす命題が生ずるのであり、こゝに價値評價の契機として、更には財の利用組織と運用の基準として限界效用を導いた意義が存するのである。從つて價値秩序の要求せられるところにこの法則は妥當するのであり、それなくしては生產と消費の適合は一般に概念し得ない。斯くてそれは經濟そのものの固有なる價値の法則となるのである。この限界效用理論によつて價値秩序が制約せられるものとするならば、價値秩序の客觀的表現である貨幣價値は限界效用理論と內面的に結びついたものと云ふ事が出來るであらう。即ち交換價値の妥當が貨幣價値の概念であり、欲望の通約的表現としてアリストテレースが nomisma と名付けたのはかゝる意味に於てである。（註五三）主觀主義に於ける價値は關係的な概念であり、それは限界效用を以て構成せらるべき妥當の限界であつた。貨幣價値はこれから價値秩序の通約性として經濟性の原理を以て基礎付けらるべきものである。この根本的機

構の故に經濟學の限界は經濟性と貨幣概念とに求め得られるとも云ふことが出來やう。而して經濟學は內在的先天的要素として經濟性を有し、その客觀的表徵として貨幣價値概念を有する。故に經濟法則は理念的には經濟性を以て、概念構成的には貨幣經濟概念を以て性格付けられる。(註五四)

かくて墺太利學派に於ては經濟性の原理を基礎とする價値秩序の內面的把握に重點が置かれ、その價値關係は物と欲望との關係に於ける判斷過程として理解された。この意味に於ける價値概念の規定が墺太利價値心理學に於て展開された所である。こゝに認識の問題としての價値問題の重要さが認められたのである。即ち實踐的經驗の內面的考察を以て、經濟學、一般には社會科學の方法の根本的特質が擧示されてゐる。それ故に導かれた法則は實踐的內面的法則であり、古典學派に於けるが如き外面的現象の規則性に關するものとは全くその機構を異にしてゐると云ふべきである。唯こゝにのべた實踐的內面的法則を明らかにする爲めに心理的說明が採り入れられたのである。從つてメンガアの價値論に於ける課題はその心理的主觀的敍述にあるのではなくして、評價自體の本質の闡明に、從つて內面的對象としての價値の把握に存するものであつて、批判はこの點からなされなければならない。

註四〇　經濟學に於ける價値論に對するマイノングの態度は彼等が經濟學以外の範圍に於ける價値概念の擴大をみとめず、一般價値概念に對して無關心であつた事を指摘してゐる。(Eaton; op. cit. p. 95)

註四一　恒藤恭「價値と文化現象」二四六頁。

註四二　Carl Menger; Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. S. 108.

註四三　a. a. O. S. 10.

註四四　a. a. O. S. 12.

註四五　價値は諸具體財又は諸財量が、吾々が吾々の諸欲望の充足に於てそれ等に對する支配に依存してゐる事を意識すること によつてそれ等が吾人に對して有するに至る意義である。(a. a. O. S. 103)

註四六　Friedrich von Wieser; Natürliche Werth, 1889. S. 5. 又、Ueber den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes, 1884. S. 82-83. Theorie der Gesellschaftlichen Wirtschaft. (Grundriss der Nationalökonmik,) 2. Aufl. 1924. S. 27. 參照、吾々は既に墺太利價値心理學に於ける固有價値と效果價値に於ける判斷の機能についてのべたが既にこの評價過程の中に於て後年の發展を豫示するものを見得る。

註四七　アリストテレースは其の「政治學」の中に於て次の如くのべてゐる。「吾人の所有する總てのものは二個の可能なる用途を有す。兩者は洵に物其の者に屬するも、而も同一態樣に於いて屬するに非ず。蓋し、其の一は全然其の物に固有にして、該物品は、斯くの如き用途の爲めに形成せられたるものなるも他は然らず。例へば一個の靴が、或ひは足を覆ふが爲めに用ひられ或ひは他物と交換せらるるが如し。兩者は共に其の靴の用途なり。即ち、靴を欲望する他人に、貨幣若しくは食物と交換して之を交付する者は、實に靴として其の靴を使用するものなり。然れども靴は物々交換の目的物として形成せられたるものに非るが故に斯くの如きは、其の本然の用途に從へるものに非ず。他の財產物件に就きても亦た同樣に言はるゝを得可し。何となれば總ての物件は交換上の用途を有するが故なり。」(高橋誠一郎「經濟學前史」改造社版經濟學全集　第二十三卷一一三頁)。

註四八　杉村廣藏「哲學と經濟學との交涉」(岩波講座「哲學」)四五頁。

註四九　Menger, a. a. O. S. 126.

註五〇　Menger; Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und die Politischen Oekonomie insbesondere. 1883. S. 58-59.

註五一　a. a. O. S. 44　參照。

註五二　Thes Suranyi-Unger; Geschichte der Wirtschaftsphilosophie. (Geschichte der Philosophie in Längsschnitten. Heft. I.) 1931. S. 11f.

註五三　杉村廣藏　前掲書四三頁以下參照。

註五四　同書一九頁。

卷末に記す

高橋誠一郎

本論文集は、安政五年に創立せられたる慶應義塾が、本昭和七年を以つて、正に七十五の齡を重ねたるを記念するが爲めに刊行せらるゝものである。而して義塾が創立七十五年を迎へたる本年は又、我が理財學會が創立後二十九年を經過し、三田學會雜誌が創刊以來二十五卷を重ぬたる年である。

現存理財學會に類する學會は、慶應義塾に於いて屢々起つて屢々消滅したるが如くである。而も同會の眞の前身と見る可きものは、明治三十年三月三十二日を以つて成立した「三田理財協會」であつたやうに思はれる

此の「三田理財協會」なるものは慶應義塾大學部理財科學生の創立する所であつて、其の目的は專ら「經濟に關する諸問題を研究する」に在つたのである。其の會員は義塾の理財學士及び理財科學生から成るものである。同會は同年四月十八日三田演說館に於いて大會を開き、

經濟學新派及舊派比較論　ドロッパース

經濟學に就いて　櫻田助作

慶應義塾理財科評論及び米國關稅案の改正に就いて　小手川豐次郎

勸業銀行に就いて　阪谷芳郎